

国際協力の現場を語る

JICA(独立行政法人 国際協力機構)は開発途上国の発展を支援するため、実務の経験と知識を持った人達を「JICA海外協力隊」として派遣しています。この人達は海外旅行などでの体験とは違った、海外協力隊ならではの様々な体験をしています。赴任国で体験した、生活、文化、人々との触れ合い、苦勞、喜び、伝えたいメッセージなどを熱く語っていただきます。

日時:毎月第3水曜日 15時00分~16時45分
 会場:JICA横浜 又はJICA東京(横浜不可時)、Web会議(Zoom)併用
 会費:無料(どなたでも自由に参加できます)
 主催:NPO法人シニアボランティア経験を活かす会
 後援:JICA横浜

(やむを得ず日時・会場が変更される場合があります。事前にシニアボランティア経験を活かす会ホームページ、または下記問い合わせ先に確認して下さい。)

問合せ先:横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜3階 国際協力連絡室内
 シニアボランティア経験を活かす会 水曜日
 Fax:045-663-3263 担当:井坂敏之(046-887-0286)
 URL <https://jicasvob.com> E-mail info@jicasvob.com



赴任国(講演者)	「タイトル」	講演概要
第209回 6月21日 (水) パラグアイ (松村 妙子)		「パラグアイの日本語教育の未来」 パラグアイとアルゼンチンとの国境の街エンカルナシオンは、戦後集団移住の玄関口でした。その街の日本語学校に学ぶ子供達は日本語を話す機会がほとんどありません。子供達にどんな日本語が必要? どんな学校が必要? 現地の先生方や移住の歴史の長いペルー、ブラジルの事例に学び、エンカルナシオン日本語学校の将来像を提案しました。この経験を活かして川崎市の小学校で外国に繋がる児童の日本語支援を行っております。
第210回 7月19日 (水) パラオ (島田 正登)		「パラオに於ける不発弾処理について」 「ERW」という言葉をご存じでしょうか? Explosive Remnant of Warの略で「爆発性戦争残存物」と訳します。戦争で使用され不発だった爆発物(所謂「不発弾」)及び使用されずに遺棄又は放置された爆発物の総称です。南国の楽園にしてダイビングのメッカとして有名なパラオで、太平洋戦争の遺物であるERWの処理にNGO活動として3年間たずさわった経験を紹介します。
第211回 8月16日 (水) 中国 (宮寄 泰樹)		「中華人民共和国に於ける駐在武官の勤務について」 北京で駐在武官を3年実施しました。当時中国には99ヶ国、約300人ほどの軍人が駐在武官として世界各国から派遣されていました。その役割は国によって異なり、親善、武器輸出入、安全保障上の情報収集等さまざまでした。私も中国の軍人達や各国の武官達と日々接して、日本では体験できない厳しい軍事情報の世界を垣間見ることができました。その世界の状況に関して語れる範囲でお話ししたいと思います。
第212回 9月20日 (水) 世界各国 (岩田 高明)	 <p>テムズ川に碇泊する練習艦かしま</p>	「海の架け橋ー日本国練習艦隊」 林子平が海国兵談を著し、「江戸の日本橋より唐・阿蘭陀迄、境なしの水路」である海を守るべきことを説いたのは江戸中期のことです。それから二百年以上が経ちますが我が国にとって海防の重要性はいささかも変わりません。海を守る任務に就く海上自衛隊は、毎年練習艦隊を派遣して世界の人々と交流することにより、平和の架け橋を創ろうとしています。その概要についてお話しします。
第213回 10月18日 (水) インド・東部 ニューギニア (金井 泉寿)	 <p>依然未帰還の英霊の御遺骨</p>	「戦没者遺骨収集活動について」 海外戦没者(沖縄、硫黄島含む)は240万人にのぼります。令和3年度末時点で未収用の御遺骨約112万柱のうち、約30万柱が沈没した艦船の御遺骨で、約23万柱が相手国・地域の事情により収容困難な状況にあります。これらを除く59万柱の御遺骨を中心に、海外公文書館からの情報や戦友等からの情報を元に、埋葬場所を推定し、現地調査や遺骨収集を推進しています。東部ニューギニアとインドのインパールにて活動したお話をします。